

論諸論所

藤井 聡

京都大学大学院都市社会工学専攻教授

今年9月の民主党の総裁選で菅氏が「世論」の後押しを受けて小沢氏に勝利し、第二次の菅内閣が発足した。一方で今年6月の参議院選では、民主党政権への不満を募らせた「世論」の後押しを受けて、自由民主党が第一党の座を奪還した。ただし、昨年8月の衆議院選では、自民党に不満を持つ「世論」の圧倒的支持を受けて民主党が大勝しており、あくまでも現在の政権政党は民主党である。

こうして、「秋の空」のようにコロコロと移り変わる「世論の気分」は、時に民主党を、時に自民党を支持することを通じて、参院と衆院の第一党が異なる「ねじれ国会」を生み出した。この状況は、自民政権下でも見られたもので、昨年の民主党の衆院選勝利の折りに一旦解消したものの、先の参議院選で再び逆にねじれ返した格好となっている。

こんな移り気な世論は、思春期の若者の姿に大いに重なり合う。思春期の若者は、その未熟さ故に安定した感情

を持たないものだから、些細なきっかけに左右されてコロコロと自らの髪形や洋服の趣味を変えていく。そんな姿は、ちょっとしたスキャンダルや耳当たりの良いワンフレーズだけで支持政党をコロコロと変えていく今の世論の姿に重なり合う。

もちろん、若者はそういう思春期の様々な体験を繰り返し成長していくのだろつし、コロコロと変えるのは所詮

ねじれ国会を好機と捉えるべし

髪形や洋服の趣味程度の事なのだから、いちいち目くじらを立てる必要などないとは言えよう。しかし、世論の移り気は、国会と内閣の人事に直結し、日本の運命そのものを決定づけるほどの影響を持っている。しかも「マニフエスト」がもてはやされる昨今では、政策内容そのものが「世論の移り気」によって決まってしまう。こんな事実を直視すれば、我々は今、自身や家族の命運が、不安定な思春期の一人の若

者、さらに言うなら一匹の移り気な子ネコにでも握られているような、空恐ろしい状況に立たされていると言わざるを得ないのである。

とはいえ、そんな空恐ろしい状況にあっても、国外に逃亡したり自害する道でも選ばない限り、その中で何とか生きていかなければならない。一旦その見定めれば、今、現時点の政治的状況の中にも、いくつかの希望を見えてくるのではないかと思つた。

まず、既に国会は世論の移り気故にねじれきつた状況にはあるのだが、幸か不幸かそのねじれ故に、多様な国民の気分の間の「矛盾」が誰の目にも明らかなたちで浮き彫りとなっている。しかも国政選挙は当面なく、移り気な世論に直接翻弄される事も無い。だからその国会のねじれを活用し、衆院第一党の民主党と参院第一党の自民党との間でじっくりと、かつ、激しく論争し

ていくことができる状況にあるのだ。つまり我が国は今まさに、国会で真正なる議論を展開できる「絶好の好機」を迎えているとも言えるのである。

移り気な思春期の若者が大人になる課程で何よりも重要なのは、互いに矛盾し合う多様な気分同士が「葛藤」を乗り越えることであつた。だからこそ、我が国が幾ばくかでも成熟していくためにも、あるいは僅かなりとも正気を取り戻すためにも、この「ねじれ国会」を、様々な政治的・社会的・経済的な矛盾を乗り越えるための「葛藤の舞台」として活用しない手などないはずなのだ。

そしてそんな「葛藤」のために何よりも必要なのは、政治的権限に劣る自民党をはじめとした野党が主導権を握るほどの真摯なる議論だ。そこである以上、我々国民は、そんな真正なる議論をこそ希求し、支援せねばならない。一人でも多くの国民が、それを心から希求し、力強く支援するならば、それが実現せぬことなど、あり得ぬはずなのだ。